

ファウスト時代

荒巻義雄



講談社

ウスト時代
荒巻義雄

ファウスト時代

昭和五十七年十一月十日 第一刷発行

著者——荒卷義雄



発行者——三木章

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽三―三―三 郵便番号二三 電話東京三―六四―二二 振替東京―五〇三

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社堅省堂

定価——八八〇円

© Yoshio Aramaki 1982. Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-200225-6 (0) (文3)

目次

プロローグ 天上の序曲 5

ファウスト殺人事件 25

エピソード
ファウスト殺人事件の探偵小説的解決および精神医学的解釈

183

わたしのファウスト——あとがきに代えて

255

カバ―装画
司
修

新探偵小説

ファウスト時代

ファウスト

ははあ、探偵が君の道楽なんだな。

——『ファウスト』書齋——

プロローグ
天上の序曲

夜——

と言っても、いろいろな夜がある。白夜。野分の吹き荒ぶ夜。暖炉の薪がはじける夜。夜桜見物の夜。夜店の並ぶ夏祭りの夜。大晦日の夜。星座の輝く夜。孤独に読書する夜。新婚の夜。自慰にふける夜。逢引きの夜。また……陰謀の夜。通夜の夜。殺人の夜もある。だが、ヴァルブルギスの夜。って、いったいどんな夜だろうか？

——つくねんと独り、男はその夜の世界に住んでいる。それは……蒼い夜である。デルボーの描くような、透明で静まりかえった夜の世界だ。

はや彼は、彼方の国の出来事の記憶の一切を、忘れようと努めている。

忘却は記憶の汚れを拭い去るからである。しかし同時にそれは、その水底のような沈黙の世界に、彼自らを閉じ込めることだった。

また、見えない檻の中の囚人とも言える。その檻は一つの閉された小宇宙でもある。そして、この檻の中にある限り、彼は自由だ。

現実には、この小宇宙に穿たれた窓の向う側にあつて、みえない鉄の格子で隔てられていた……。

——「思いだせないようね何もかも……」

遠井千津子は、連れの男に振り向いて言った。齡の頃は二十二、三、顔だちも衣裳もあてやかな女である。「けど……、ほらね、ときどき笑うでしょ、口元のところ……」

千津子は連れの青年に、ちよつと甘いハスキーな声で、小さく瞬いた。「露木さんはまだ、あたしたちの顔を覚えているんだわ、きつと」

たしかに千津子の指摘どおり、露木一二三の表情はかすかに彼らに反応している。

「でもね、さっきあの若いハンサムなお医者が話してくれたでしょ、露木さんの病状はぐんぐん悪化しているって……」

「ああ、言ってみましたね」

「とすると露木さんは、このまま治らずに一生をおわるのかしら……」

「かも知れませんが」

この連れの男は、輪久保機男わくほほたけおといって露木と親友だった男である。彼女よりは三つ、四つ老けた感じだ。

「気の毒ね」

彼女は細長い眉を蹙めた。だが露木は依然として無表情である。瞳を窓の外へ遠くやって虚だ。

「仕方ありません」

輪久保はしたり顔で言った。「いや、その方が露木さんにとっては、むしろ幸せなんじゃないのかな。だって……」

輪久保はさもそれが大発見であるかのように、「……たとい治って病院の鉄格子の外へ出られたとしても、この人は一生殺人犯の汚名を背負って生きて行かなくちゃならないんだから……」

「それもそうね。でも可哀そうよね、やっぱり……」

「おや、千津子さん、今更そんな……。警察だってそう考えて露木さんを検挙したんだし、専門医の鑑定を採り上げたからこそ起訴猶予になったんじゃないですか」

「ええ、そうよね……」

別に抗^{さか}らう積りはないらしく、遠井千津子はうなずいた。

そして、急に何かの用事を思い出したのか、小首を振って、

「ね、そろそろ帰りましょうよ」

と彼女は輪久保に目配せし、挨拶してもてんで反応のない露木一二三にむかって、「じゃあね、露木さん、またお見舞に来て上げますからね」

と慰めるように言い、「さあ、行きましょう」と輪久保を促した。

その病院は杉並の街中にあった。小ぢんまりした私立の病院だ。建物も割合開放的な感じで救われる。

千津子は表通りで個人タクシーを呼び止めて輪久保機男と一緒に乗り込み、「青山へやって」

と運転手に頼んだ。走り出した車の中で、

「あなたを、何処へ降ろしたらいい？」

「そうですね、渋谷の駅で。……おれ、地下鉄で帰ります」

彼女は運転手に、

「いま言ったとおりにね。あたしは表参道の交差点で降りますから」

ふたたび輪久保に向って、「結局、 Hoffman 座は解散することになるんでしょ？」

「ええ、このまえ影沼に面会したとき、そのことでちょっと話し合っただんですがね、彼は、

『 Hoffman 座は、女王蜂のいなくなった蜂の巣みたいなもんで、結局は解散するほかないだろう』って……」

「そうね、で、あなたはこれからどうなさるお積り？」

「おれなら、今までどおり、食っていくあてがあるから困らないけど。でも、もう……」

気ぜわしく、コール天の上衣のポケットからハイライトを出してくわえ、「とにかくおれ、

人形劇だけは辞めますよ」

と言って、火を点けた。

「そりゃ惜しいわよ。だってあなたの人形造りの腕は一級品なんだから、どこの劇団でも大歓迎じゃなくって？」

千津子はハンドバッグから、これはアメリカ煙草のラークをとりだして粹っぽくくわえ、輪久保の差しだす百円ライターの火を受けながら言う。

「ええ、まあ……、実を言うとそんな誘いはもう二、三の劇団からあるんだけど、どうにも気

が進まなくて……」

「ふーん、つまり遙子さんの魔力があなた方劇団員にとっては、それほど強烈だったってことね」

軽く吸い込んで、煙を吐きだす。

輪久保はこくりとうなずいて、

「まあね。不思議な魅力もあったが、あの人は影響力もたしかにあったな、いろんな意味でね」

頬骨の張ったごつい顔の輪久保は、西洋人のように肩をすくめると、

「遙子さんで相当な悪だったけどさ。露木さんは結局あの女の魔力に魅入られた挙句、結果はあんなことになっちゃった……」

言葉を濁して、ベレー帽の頭を傾げ、

「でもさ、千津子さん。もうこの話は止しにしましょう」

「そうね、あなたがそう言うんなら止してあげる。けどひとつだけ……、ね輪久保ちゃん、ホフマン座の活動資金のことだけ……」

と探るような視線を投げかける。

「さあ、おれは知らんけど……、劇団の経理は影沼の担当だから」

「……けど、帳面は影沼さんが見ていたとしても、お金の出し入れは死んだ遙子さんがやってたんじゃない？」

「ええ、そう。銀行の印鑑は彼女が保管してましたよ」

「でも、その印鑑がみあたらないのよ」

「さあ、おれは知らんなあ」

「ほんとに？」

「ほんとうですよ。経理はね、遙子さんと影沼の二人でやってて、他の劇団員は誰も知らないんです」

「まあ、呑気な話ねえ」

千津子は呆れたという顔を輪久保に向けて、「本当に知らないの？」

千津子は強い疑いの眼をして尋ねる。

「ほんとうですつたら……。なんなら、今度面会するとき影沼から直接聴いてみたらどうですか……」

「それが、彼教えてくれないの……あたしには」

「ああそう……」

輪久保は微かに笑った。

「ねえ輪久保ちゃん、これでもあたしは出資者なのよ」

「それ、はじめて聴きました」

「百万出したのよ、あたし」

「証拠は？」

「遙子さんよ。あたし、あの人に頼まれて、ちゃんと預けたんですから」

「しかし、その肝心な遙子さんが死んでしまったんじゃあ、証拠にならんでしょうが」

「でも、これは事実よ。あたし、何としてでも百万返してもらうわ、あなた方から」

「……あなた方って言うとおれもそんな中に入ってるんですか」

「むろんよ」

千津子は表情を堅くした。

「とにかく、おれは何も知らんですよ。そういう話なら、直接、影沼にしたほうがいいですよ」

「それが駄目なの、……ね、輪久保ちゃん、あなた、あたしと組まないこと？」

「そうね。考えてみてもいいけど、しかしね、あの通帳のお金は、劇団員全体のものだと思うけどなあ」

「そりゃそうよ、むろん。影沼さんも一応口先だけでしょうけど、そう言ってたわ。自分が出所できたら分配するって……」

「だったら影沼の出所を待つしかない。印鑑が無くっちゃ、いくら預金通帳があったってお金を引き出せないでしょう……」

「そうよね。ほんとに肝心の印鑑はどこへ行っちゃまったのかしら？ ……」

——やがて輪久保機男は、車を降りた。

千津子は笑顔をつくって、「じゃあね」と、車の中から彼を見送った。

ふたたび車が動きだすと、遠井千津子は深々とシートに腰を埋め、ふたたびラークを口にくわえ、純銀のカルティエをかちりと鳴らした。

このライターの贈り主はドイツ人。彼女の数ある顧客の一人である。

遠井千津子は娼婦、である。

大方、彼女と畔沢遙子との関係も、そんなところから始まったのだろう。二人は同じマンションで、隣り同士の住人であったのだ。

——信号が赤に替った。

「ここで降りるわ」

と彼女は言つて、タクシー券をとり出す。馴染み客の一人がくれたのだ。金色のボールペンで料金を書き入れ、引きちぎった紙片を運転手に渡す。

青山通りは、新緑の季節の中だった。

彼女の背後から、野暮つたい通学服の一団が、足早に行き過ぎる。千津子は、裏通りへ折れた。小さな洋菓子店に入つて、チョコレートショップのショート・ケーキを二つ買った。

やがて、煉瓦色の壁の、小ぢんまりしたマンションに着くと、彼女は入つていった。玄関ロビーの奥にあるエレベーターの前に行く、只今点検中の札が下がっていた。「ちえッ」と、男のように舌打ちすると、横手の階段を昇りはじめる。そのスリムな姿態はちよつとしたものだ。

息を切らして昇つた七階の突き当りが、男の部屋である。フザーを押す。ドアが開くと、タオルのガウンを引つ掛けた彼が顔を覗かせた。

「あのう……、お車のセールのことで参りましたが……」

と千津子は巫山戯て言う。

「車か？ ……そうだね、試乗させてくれるかい？」